学習動機と相互説明における目標設定の関連

篠ヶ谷 圭太

(日本大学)

キーワード：相互説明，目標設定，学習動機

Relations between learners' learning motives and goal setting in interactive explanation

Keita Shinogaya

(Nihon University)

Key Words: interactive explanation, goal setting, leaning motives

目 的

学習者同士で相互に説明しあう活動（相互説明）には，内容の理解の深化や自身の理解の不十分さへの気づきなど，様々な効果があることが指摘されている。近年では，言語力や表現力の育成といった教育目標が掲げられていることから（文部科学省，2008），教育現場では，以前よりも積極的に，学習者同士の説明活動が取り入れられるようになってきている。ところが，実際に相互説明を行うと，学習者は，相手の理解を確認する，互いの意見の相違点を議論するといったやりとりではなく，ともすると専門用語の確認やクイズの出し合いに終始してしまう（植阪ら，2013）。

では，なぜそのような相互説明が展開されてしまうのであろうか。個人で学習を行う際に，学習者がどのような方略を用いるのか，自己調整学習（self-regulated learning）に関する先行研究では，学習者が設定する目標が，学習の様式（学習方略）に影響を及ぼすことが指摘されている（Muis，2007）。こうした枠組みを相互説明に援用するならば，学習者同士で行われる説明活動の背景には，学習者が設定する目標が存在している可能性が考えられる。そこで，本研究では，学習者が相互説明時に設定する目標の抽出および分類を行った。なお，先行研究では，学習者の学習動機（勉強に取り組む理由）によって，個別学習時の目標設定や方略使用が影響を受けることが指摘されているため（e.g. Bonney et al., 2008; 堀野・市川，1997），本研究では学習者の学習動機と相互説明時の目標設定の関連についても検討を行った。

方 法

調査対象 栃木県の公立中学校の1年生および2年生計170名（うち有効回答数は159名）。質問紙を学校に郵送し，HRの時間を利用して実施してもらった。対象科目は数学とし，学習動機と相互説明時に設定する目標について回答を得た。

学習動機 学習動機とは学習に取り組む理由である。篠ヶ谷（2010）と同様，内容関与動機に関する5項目（e.g., 新しいことが知れておもしろいから）と，内容分離動機に関する5項目（e.g., 新しいことが知れておもしろいから）を使用し，5件法（1：まったくあてはまらない～5：とてもよくあてはまる）で回答を求めた。

相互説明時の目標 相互説明時に学習者が設定する目標については，自由記述により回答を求めた。「授業中にペアになる活動では，どのようなことに注意していますか？」という指示文に加え，回答のイメージがしやすいように，「自分がしっかりと内容を理解しているか」「相手がちゃんと内容を理解しているか」などの例を提示した。

結 果

学習動機による学習者の分類 内容関与動機に関する5項

目と，内容分離動機に関する5項目の α 係数を算出したところ，それぞれ0.83, 0.78であったため，項目平均値を算出した。

相互説明時の目標の分類 相互説明時に学習者が設定する目標については，筆者と2名の学生で協議を行いながら，内容の似ている記述をカテゴリー化してラベル付けを行った。その結果，本研究で得られた記述は1) 自分の理解状態を意識した目標（e.g., 自分がちゃんと理解できているか，間違った説明をしていないか），2) 相手の理解状態を意識した目標（e.g., 相手がちゃんと理解できているか），3) 自他の理解状態を意識した目標（e.g., 自分と相手が同じように理解できているか）の3カテゴリーが抽出され，それぞれ自己理解目標，他者理解目標，共通理解目標と名付けた。なお，本研究では学習内容の理解に関係のない目標（e.g., 相手に声が聞こえるように）は分析から除外した。

学習動機と目標のタイプの関連 内容関与動機，内容分離動機それぞれについて，尺度得点の平均値を基準にして高群と低群に分け，群によって目標設定のタイプに違いが見られるかを検討したところ，内容関与動機に関しては有意な結果は得られなかったが，内容分離動機の高群と低群で比較した場合，学習者の目標設定の比率に有意な群間差が見られた（Fisherの直接確率法， $p = .011$ ）。結果をTable 1に示す。

Table 1 内容分離動機と相互説明時の目標設定の関連

	自己理解	他者理解	共通理解
分離動機高群(n = 67)	41	13	13
分離動機低群(n = 54)	20	11	23

考 察

本研究の結果，内容分離動機の低い学習者は，内容分離動機の高い学習者に比べ，自身の理解だけでなく，他者と共通の理解を志向した目標を設定することが示された。内容分離動機の低い学習者とは，逆に言えば，内容関与動機のみが高い学習者である。このような学習者の場合，学習内容そのものに価値を見出しているため，自身の理解と他者の理解のどの点が同じで，どの点が異なるのかなどを意識しながらペア学習に臨んでいることが示唆される。このような目標設定は，相互作用における発話に大きな影響を及ぼすものと考えられる。

これまで，学習動機は個人で学習を行う際の方略使用に影響を及ぼすことが示されてきたが（Bonney et al., 2008; 堀野・市川，1997），本研究では，相互説明に臨む際の目標設定にも，学習者の学習動機が関連していることが示された。今後は，目標設定と実際の発話の関連についても検討を行いながら，他の学習者と相互作用を行う際に学習者が辿る認知的，メタ認知的プロセスを解明していくことが求められる。